

<シンポジウム 7>パーキンソン病の病因・診断・治療研究の進歩

オーバービュー

座長 順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院 水野 美邦
和歌山県立医科大学神経内科 近藤 智善

(臨床神経, 49 : 881, 2009)

パーキンソン病の症状発現が脳のドーパミン欠乏に由来することが明らかになって以来, 治療に関しては様々な薬剤が開発され, 不十分ではあるにしろエビデンスに基づいた標準的な治療が提唱されるようになった。しかしながら, 病気の進行にともなって生じる運動合併症や非運動症状は依然として未解決であり, 現在まで, パーキンソン病研究者に課せられた大きな課題となっている。

日本神経学会が設立され 50 年が経過した現在, パーキンソン病の研究・治療において, 今われわれがどこにいるかを確認すること, これから何をなすべきかを明らかにすることはきわめて意義深いことと思われる。

本シンポジウムでは, 「パーキンソン病の病因・診断・治療研究の進歩」と題して, 近年研究の進歩が著しい分野, すなわち, パーキンソン病の病因・病態に関する話題と, 診断, なか

でも非運動症状にかかわる病理・病態生理, 遺伝子治療について, 領域をリードする 4 人の演者に, 臨床医に理解しやすい translational な立場で講演していただくことにした。

テーマとして, 遺伝性パーキンソン病の研究とくに遺伝子機能の解析 (とくに Park 2 について) とその機能障害から考えられる黒質細胞死の機序について, また弧発性パーキンソン病の細胞死カスケードについて臨床疫学や分子遺伝学的危険因子に関する最新情報, Braak 仮説に基づいたパーキンソン病の嗅覚異常と病理・病態生理, ウイルスベクターをもちいたドーパミン合成酵素遺伝子を脳内に導入する治療, を選んだ。

近年, 症候的治療以外に細胞保護療法への期待が高まっている。本シンポジウムの内容が, 発展, 結実し将来パーキンソン病治療の実際において寄与できることを願っている。